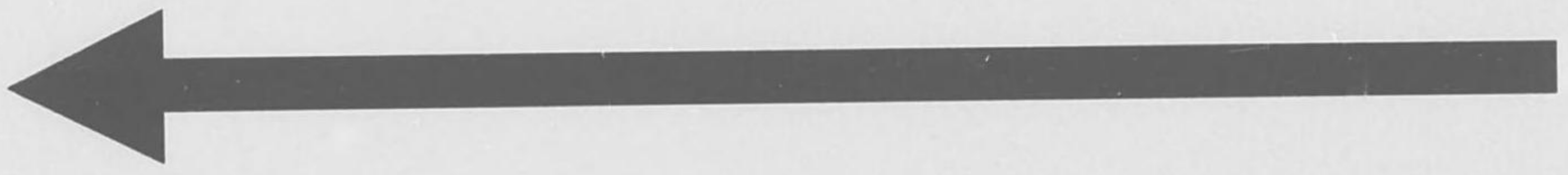


8  
222

Ⓜ



始





8  
22

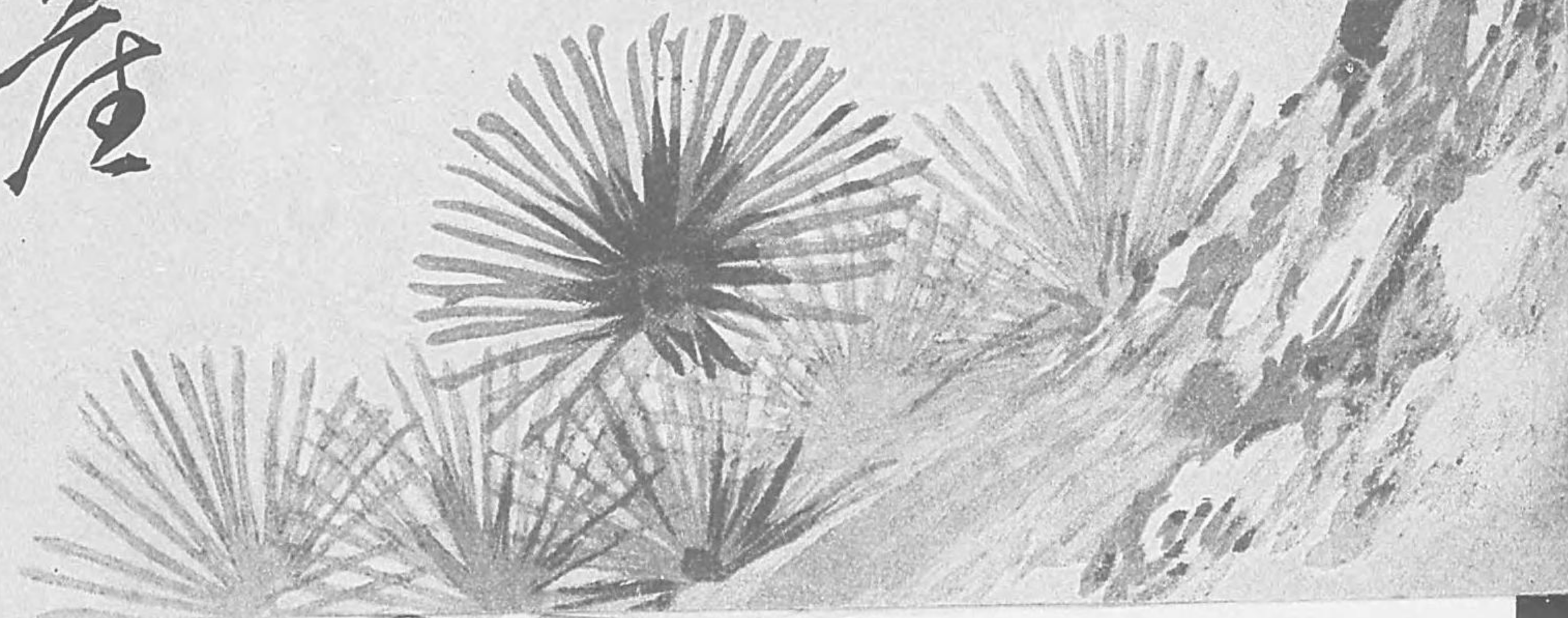
旅乃

家

土産

富士の

巻





富士登山三十三度大願成就



予て予務也折時

百景

ハセ

薩陲峠

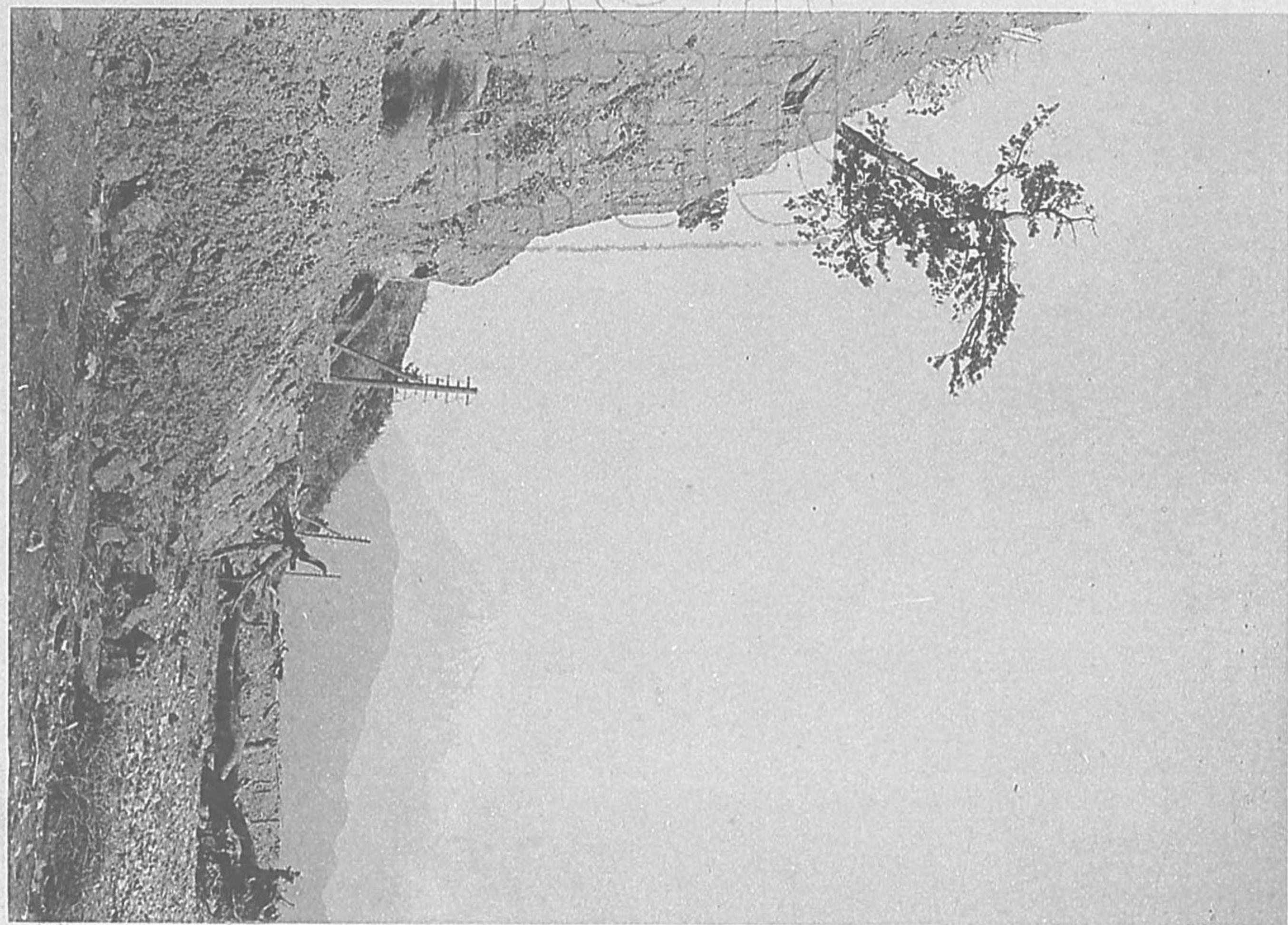
薩陲峠望嶽亭

几案

晴る、日也

雲をつらぬく雪の富士





蘭園



蘭園

蘭園

蘭園

蘭園

蘭園







岩淵

長明道記

浦原さいふ宿のまへを通る程におく  
 入たるものまぢつけんさある家におく  
 旅衣すそ野の庵のさむしるに  
 さいふ歌なり心ありけるき富士の白雪  
 さにやあるらんさむかし香爐峯の麓  
 に庵をしむる隠士あり冬のおらしに  
 宿かる行客ありさる夜ころもあらしに  
 しきて山の雪思へるかれこれもかた  
 に心すみておぼゆ





富士川假橋

芙蓉

梁川星巖

自從混沌死 世界孰其雄 一嶽排元氣 群山趨下風  
驤車驚欲墜 天勢失尊隆 帝亦鍾不得 留之鎮大東  
不知高幾許 但覺通乾坤 冰雪無冬夏 雲烟有吐吞  
人稱三國一 天放獨峯尊 昔上真如劍 寶山真小孫  
經始果何歲 化兒多費工 八方無向背 一白只珍瓏  
彼自處尊大 視人如蟻蠃 誰能凌絕頂 槌擊碎龍從





水神の森

伊勢物語

富士の山を見れば五月のつもごりに  
雪いさ白う降り  
時しらぬ山はふじの嶺いつまでか  
鹿子またらに雪のふるらん  
その山はこゝに譬へば比叡の山を二  
十ばかり重ねあげたらんほどして形  
は沙尻のやうになんありける





鹿島村

千種有功卿

千度見て千度めづらし雲風に

姿きたためぬ富士の芝山

長井 裁之

うこきなき大和島根をねさしにて

雲井に香ふ花はらすかな





吉原並木

霞原驛望富嶽 石正翁  
日出芙蓉立馬看 三峯半入大清寒  
紫烟輕繞仙人掌 白雪長封玉女壇  
嶽足千家通浦口 原頭一路接雲端  
奇言此處樵漁侶 誰摘流霞供我餐  
涼 苑  
旅人行囊くも頭巾不盡風





依田村

惟直

山みても大和心をほころるゝ  
花のみよし野雪のふしのれ





鈴川河合橋

十六夜日記

富士の山を見れば煙もたいすむかし父の朝臣に  
誘はれていかになるみの浦なればなき味みしこ  
る遠江の國まては見しかは富士の煙の末な朝夕  
たしやに見えしものないつの年より絶えし夕  
問へばさたかに答ふる人たにもなしの嶺の  
誰か方になひきはていふじの嶺の  
古今の序の事まで思ひ出られて  
いつの世のふもさのちり富士のれを  
くらはてしなから雪さへ高き山さなしけん  
富士のけふりもたいすなりなほ





田子の浦

望不盡山歌一首并短歌  
 天地之分時從神左備而高貴寸山部赤人  
 能高嶺乎天原振放見者度日之陰毛隱比布士  
 月乃光毛不見白雲母伊去波伐加利時自久  
 曾雪者落家留語告言繼將往不盡能高嶺者  
 田兒之浦從打出而見者真白衣不盡能高嶺爾  
 雪者雪家留  
 白隱師相見  
 涼しさや不盡と和尙と田子の浦 蓼 太







檜新田

石川丈山

仙客來遊雲外嶺

神龍栖老洞中淵

雪如純素烟如栖

白扇倒懸東海天

心あてに見し白雲は麓にて

村田春海

思はぬ空に暗るいふじのれ





砂  
山

東路は衣手寒しふしの根の  
雪よりおろすあまの初風

千種有功卿







### 富士沼

はせな

崑崙に遠く開蓬萊方丈は仙の地なり  
まのあたり土峰地を拂て蒼天をおさ  
ふ日月の爲に雲門を開くかこむかふ  
さころ皆おもてにして美景千變す詩  
人も句を盡さす才士文人も言を斷畫  
工も筆を捨て走るもし藐姑射の巧の  
神人ありて其詩をよくせんか其畫を  
よくせんか  
雲霧の暫時百景をつくしけり





原

あづまの道の記 僧正尊海

これよりふじ山を見んきて立出ける  
道に原さいへる所の庵主に手ならふ  
人の里あればそこに至りて夜もすか  
らわかき人たちとかり侍りて  
夢うつし何とさためんかりまくら  
かはすこまはのうちに別れて





静  
浦

見  
つ  
け  
ら  
れ  
ば  
清  
に  
つ  
く  
松  
原  
も  
富  
士  
の  
高  
嶺  
の  
雪  
の  
下  
草

本  
居  
豊  
頼

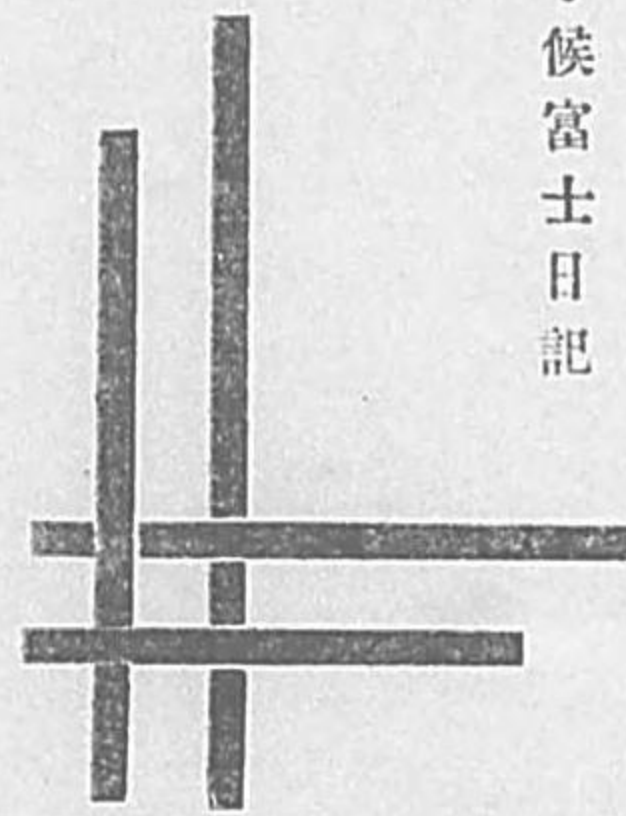




井  
江の浦

晴れて候又曇り候富士日記

其角







御殿場

更科日記

富士の山この國なりわか生ひ出し國  
にては西面に見へし山なりその山の  
さまいさ世に見へぬさまなりさまこ  
さなる山のすかたの紺青を塗りたる  
やうなるに雪のきゆる世もなく積り  
たれば色濃き衣に白き袖きたらんや  
うに見えて山の嶺のすこし平きたる  
もより烟は立のほる夕暮に火の燃え立  
も見ゆ







御殿場 (三)



契 沖

そらにみつやまごしまれに二つなき

寶さなれるふじのしはやま











長原 (一)

香川景樹

大かたは雪と雲とにうつもれぬ  
あまりに高きふしの山かな







長原 三

香川景樹

肌すら氷るばかりに寒き夜を  
おもへばふしの麓なりけり





御殿場附近

望富嶽

江村天海

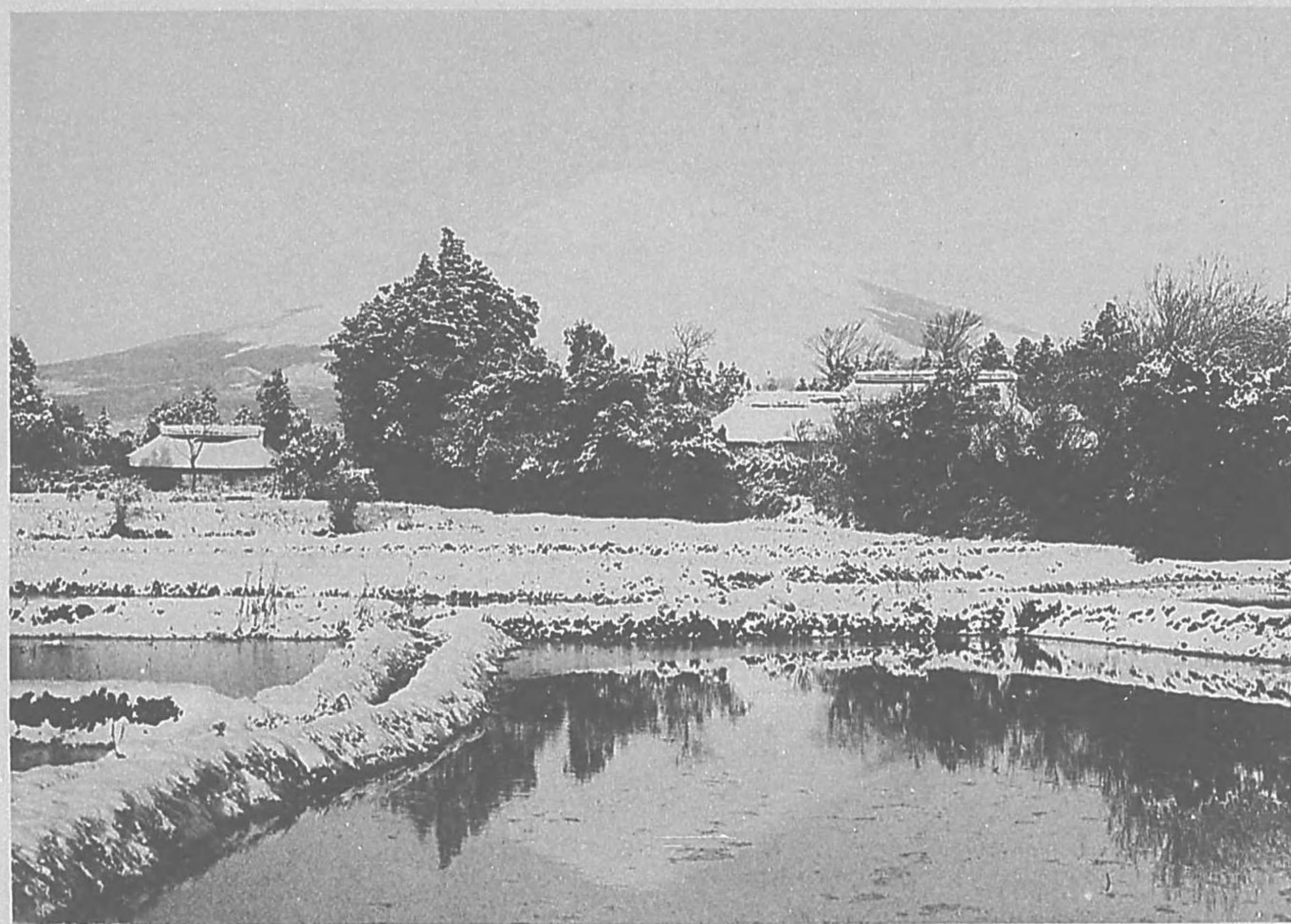
萬里秋風拂玉鞍

芙蓉直仰碧天看

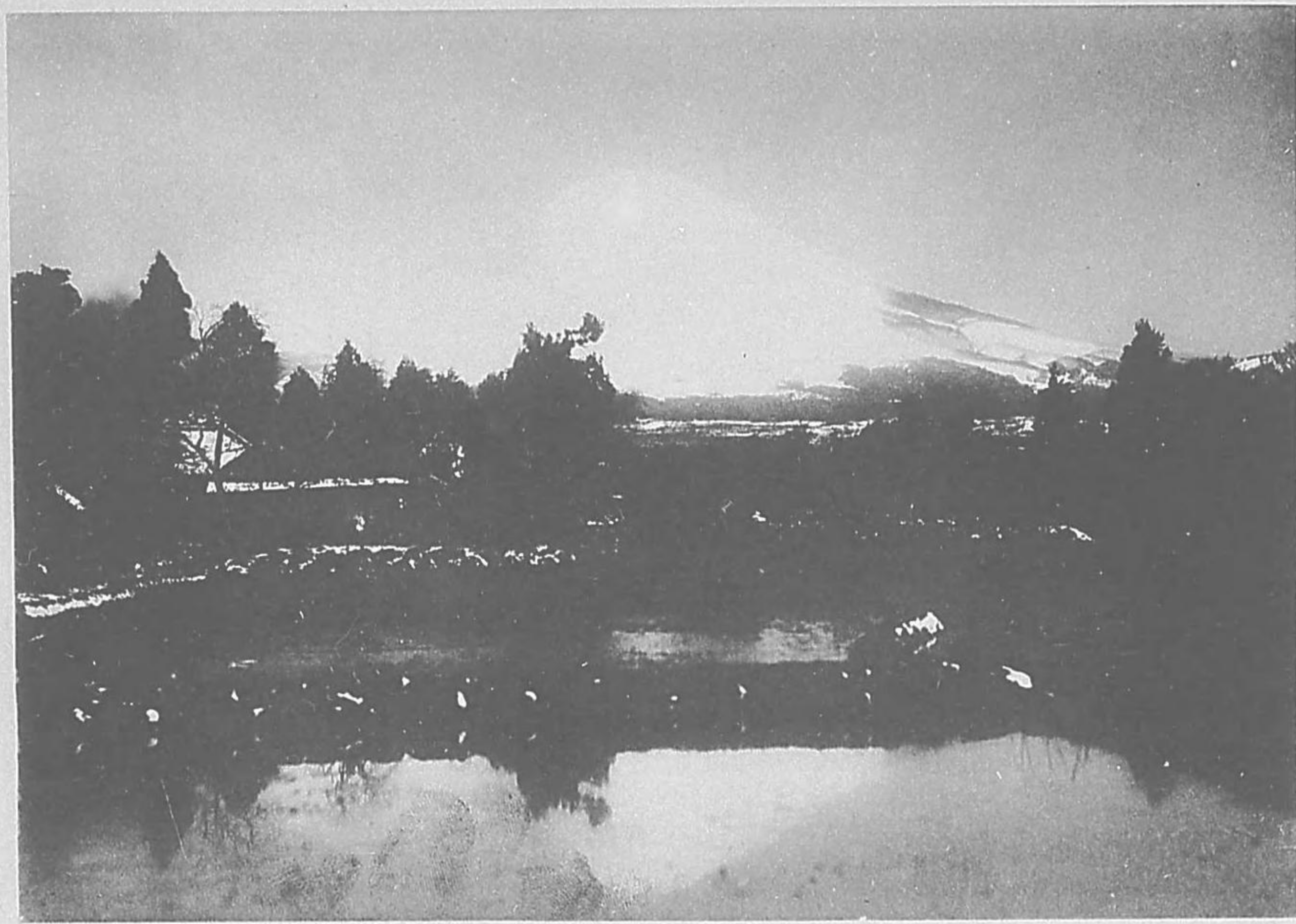
日華浮動千年雪

散作扶桑九月寒









御厨月夜

讀人不知

幾度か旅寝の夢をくり返し

月に見渡す富士の松原

永花

月の照いつくにふしの影法師





御殿場冬曉

源實朝

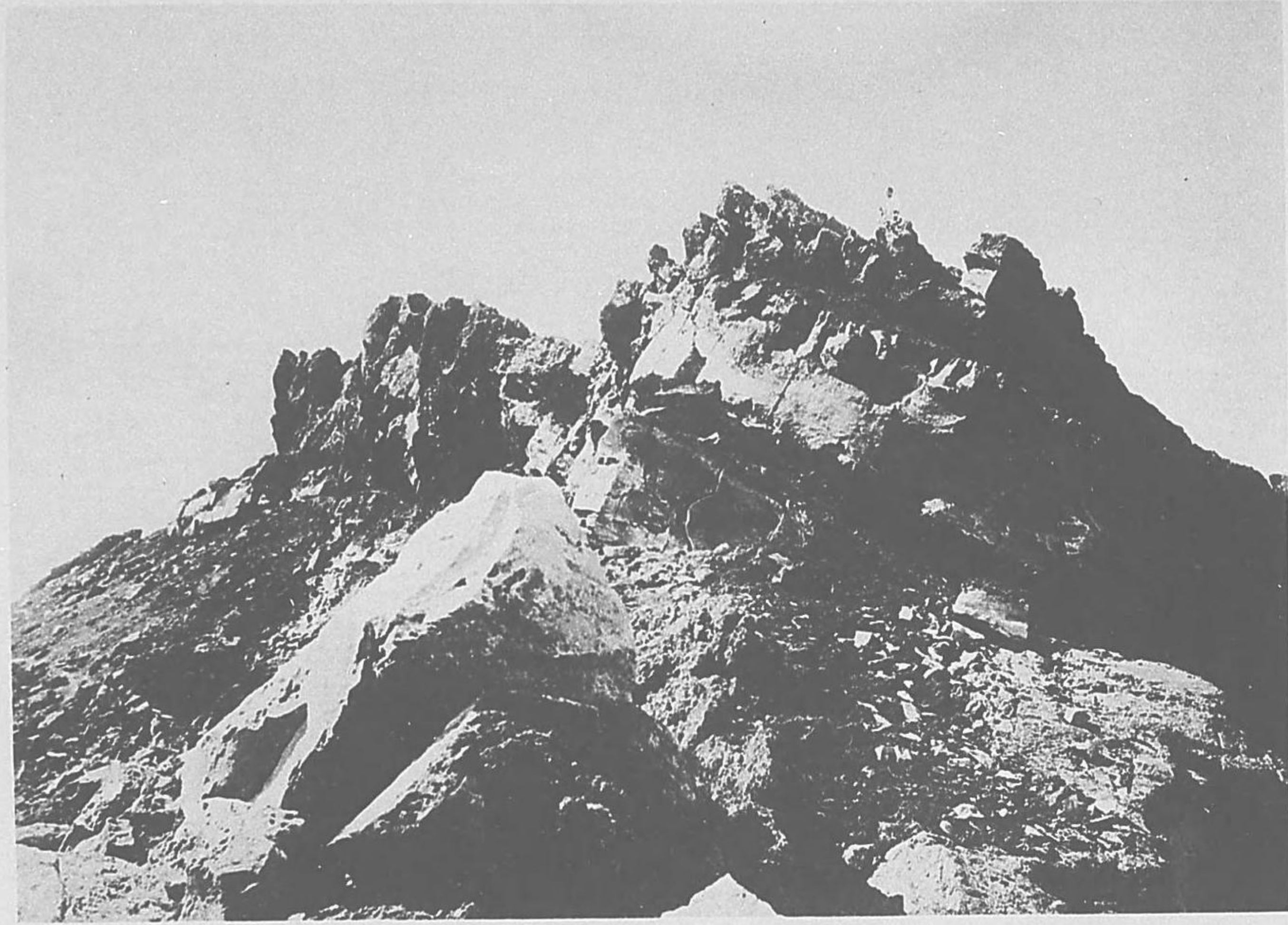
見わたせば雲井はるかに雪白し

富士の高嶺のあけぼの、空

素外

あら淋し雪のあしたの不慮の山





劔峰

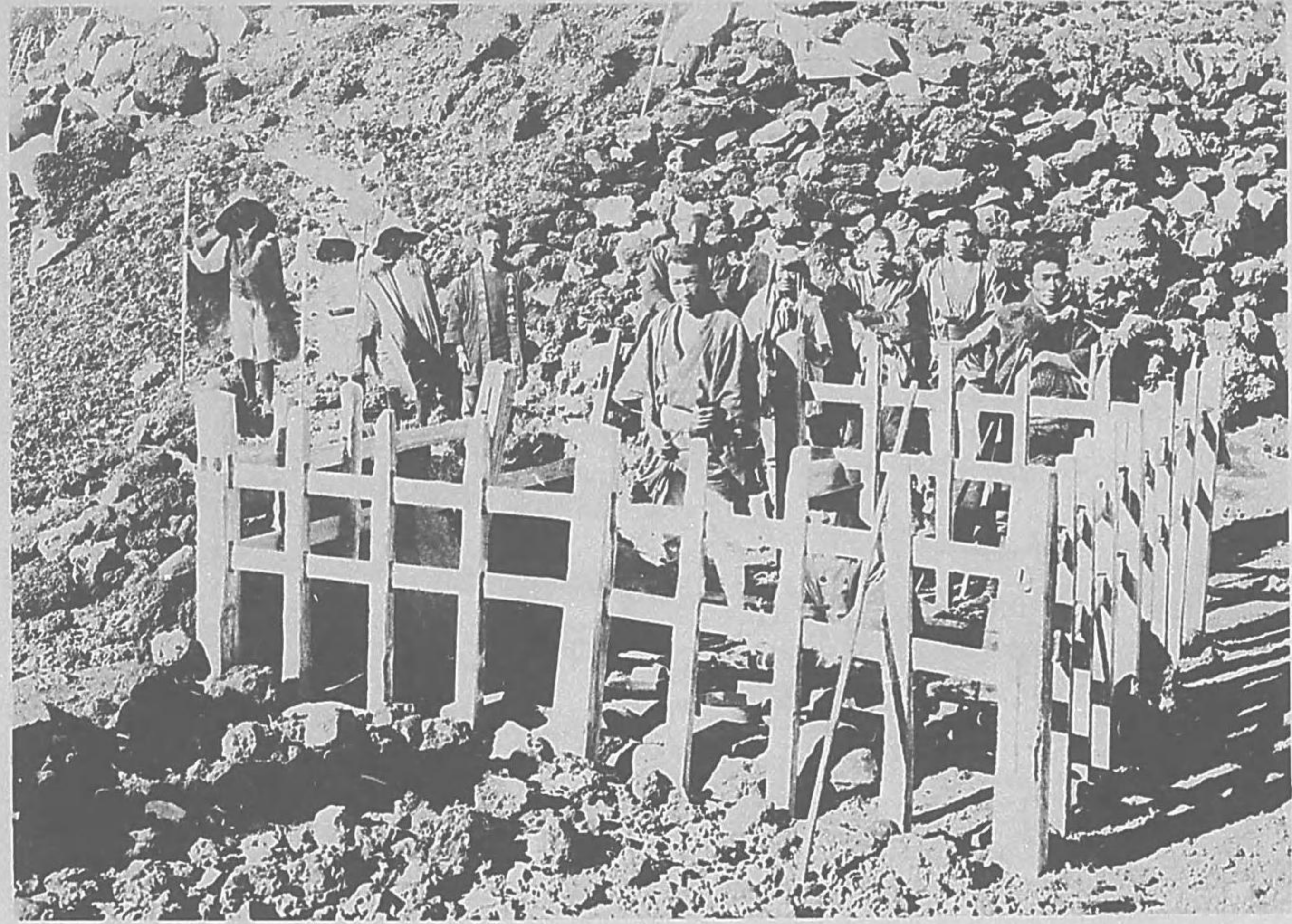
富嶽遊草 末永鉄麿

劔峯高四百尺、八衆之最高者、既達絶頂、峻巖卓  
拔如列巨刃、巖質極堅緻、試敵之際、爾作響、不似  
他嶽燒碓々也、蓋方絶頂噴火時、免其摧切、故能  
存固體也、野中側候所、在乎山頂、

\* 荷田東磨

きいしよりも思ひしよりも見しよりも  
登りて高き山はふしのね





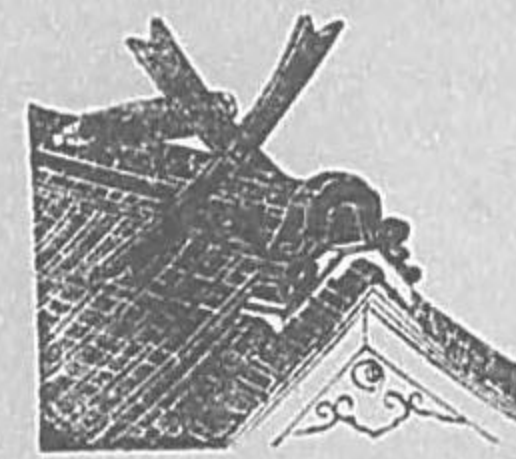
山頂銀明水

末永純

あつきの星はまばらに影さえて

夏もこぼれる

白銀の水







### 山頂本社

富嶽遊草

絕頂南方，有平敞之地，方數十坪，前面則弱嶽，右側接剝峯，左側成就嶽，後面則休火大嶽也。敞地有石屋三椽，一見如亞字，中央為淺間祠，左右同乎各石室，絕頂淺間祠以夏期某月某日開籠，某月某日闔，各石室皆准之。淺間祠祀木華開耶姬，本宮在大宮，即昔為官幣大社，此其奧宮也。社藏絕頂印，登山就而押之，金剛杖其他器具，登山愈數押印愈多，賽客以為祭云。社前有華表，鐘懸之，賽客到此，則以杖一撞，跪拜于殿前而退，其聲洪々，上震帝座，下破霄達，神思澄然，六根清淨矣。









吉田口

天地の半をさくる富士詣

嵐雪



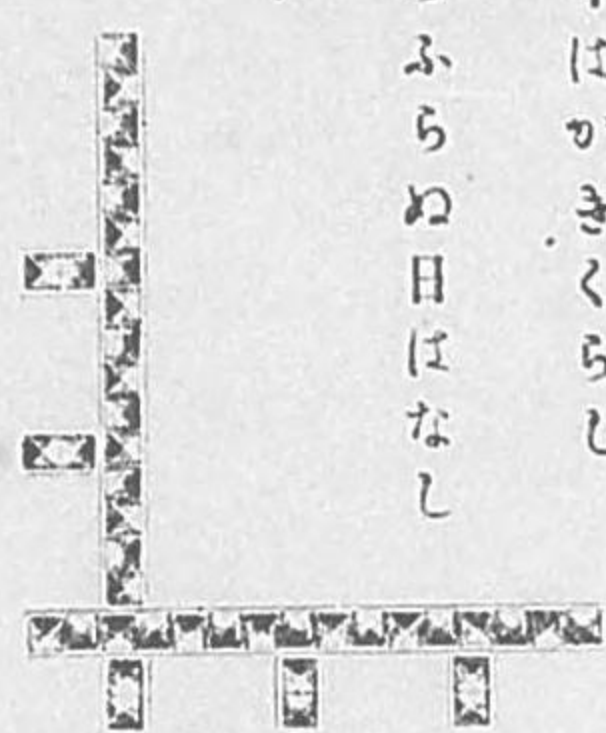




吉田河口

藤原家隆

富士の嶺や山も今はつきくらし  
あまきる雪のふらぬ日はなし







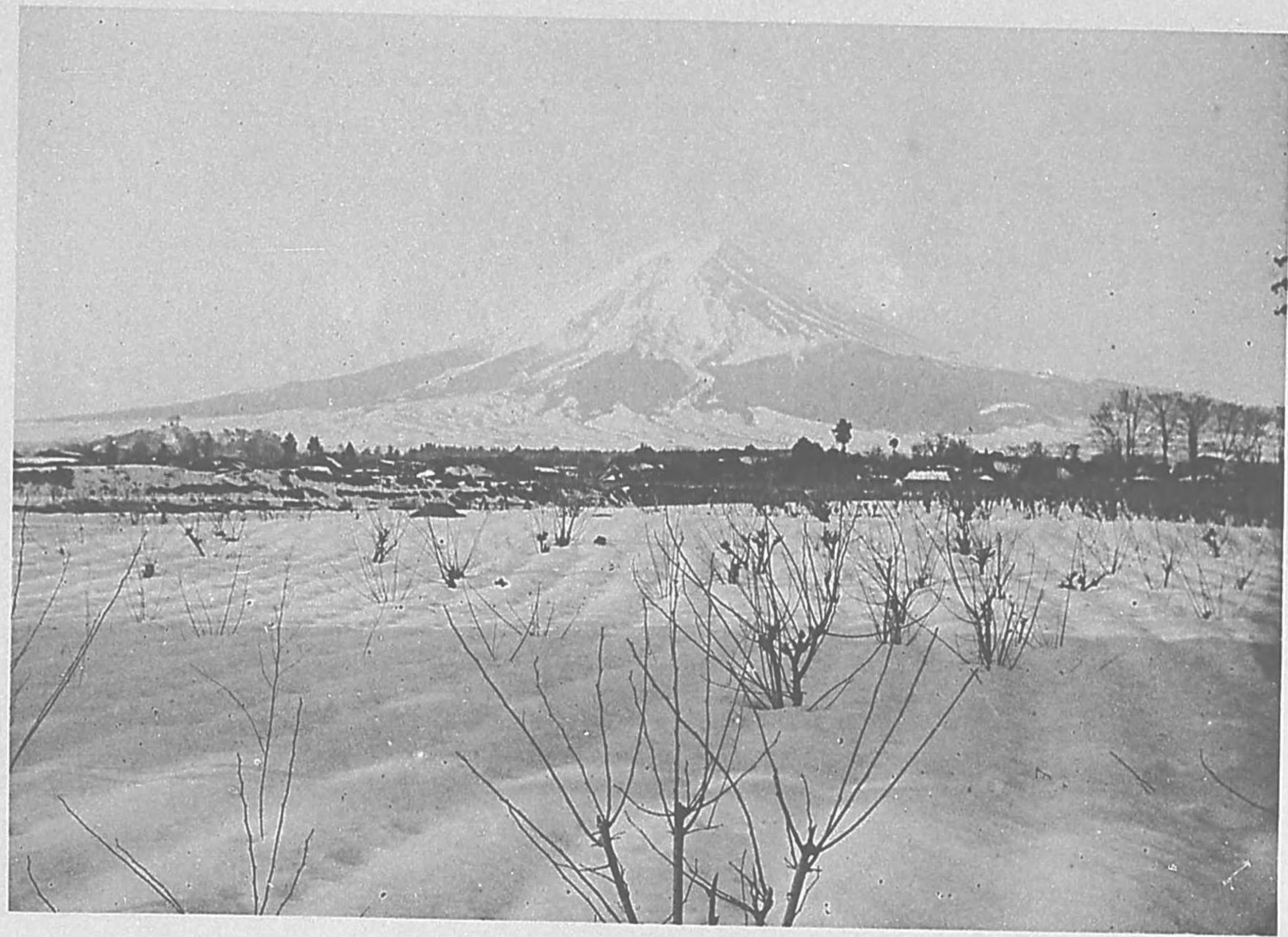
上吉田 (一)

法印度運

足柄の山たち隠す霧の上に

ひっそり晴れたる富士の白雪





上吉田

(1)

水無瀬申納言

わすれては空にも雪のつもるかこ

見れば雲間にはるゝふしのね







吉田口水穂橋

いづくよりむらふも

平高保

おなしおもてく

空にそむかぬ山はふしのね

崇 崇 崇 崇 崇







甲州吉田口水穂  
村信玄鐘掛松

智月

降る雪に猶大きい

不慮の山

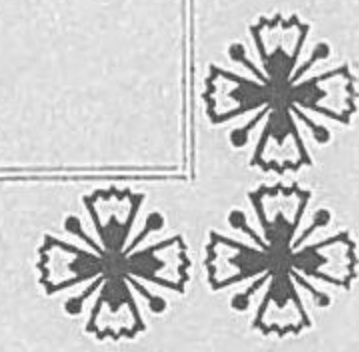




船津唐松峠

都人あつさや  
いかに手にうけて  
まきふらさばや  
不二の白雪

末永純







河口湖畔産家崎

賀茂真淵

駿河なるふしの高根はいかつちの

音する雲の上にくそ見れ





三坂峠

芳宜園

はこれ路やいみの三坂を越えきても  
猶ふしのれは雲井なりけり  
\* \* \* \* \*  
\* \* \* \* \*



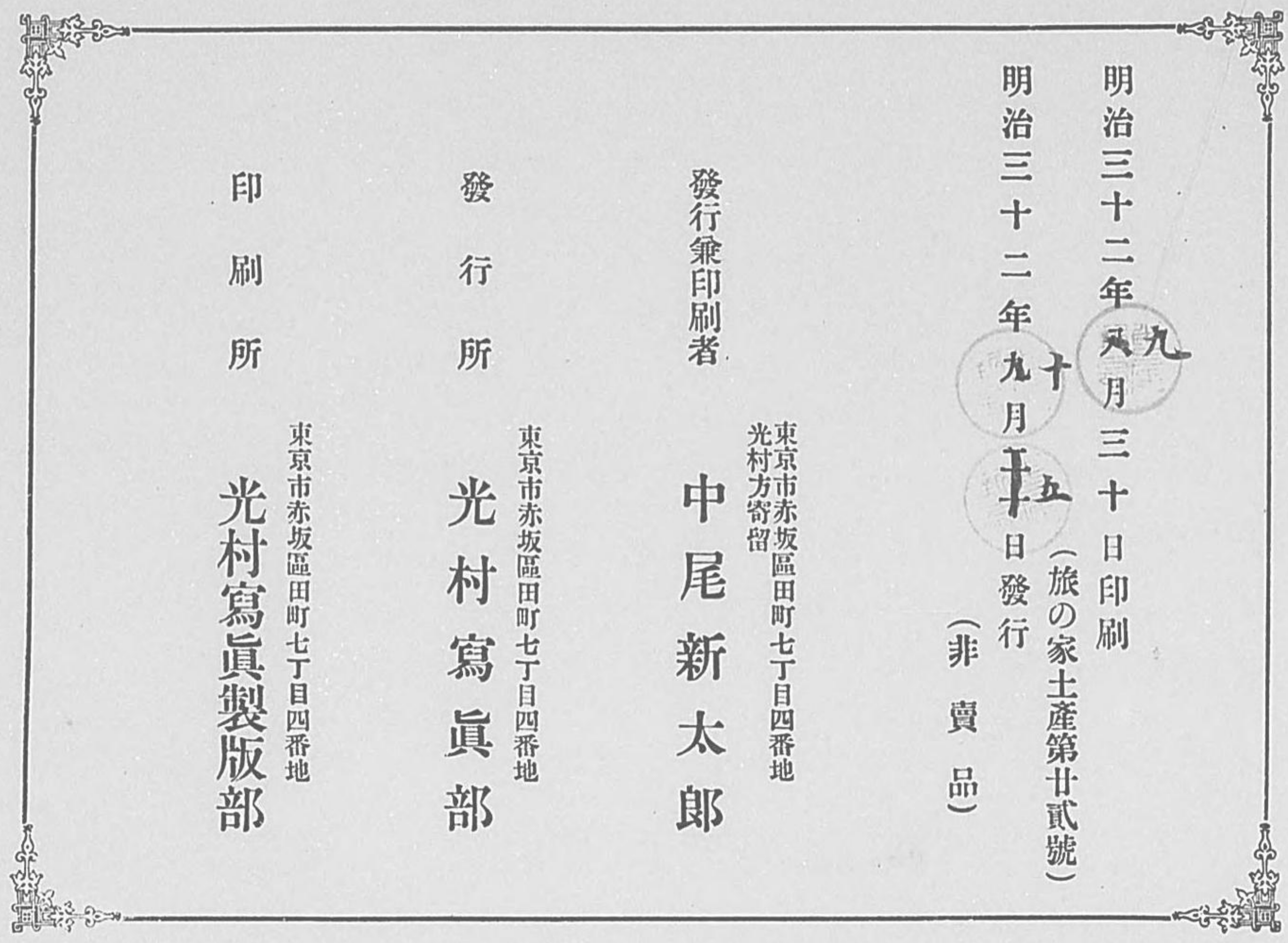


明治三十二年九月三十日印刷  
明治三十二年九月十五日發行  
(旅の家土産第廿貳號)  
(非賣品)

發行兼印刷者  
中尾新太郎

發行所  
光村寫真部

印刷所  
光村寫真製版部





8  
222



明 曜 祀

光 林 寫 真 變 照 游

東京市赤坂區田町三丁目四番地

發 行 祀

光 林 寫 真 游

東京市赤坂區田町三丁目四番地

發 行 祀

中 風 祿 太 潤

東京市赤坂區田町三丁目四番地

(非 賣 品)

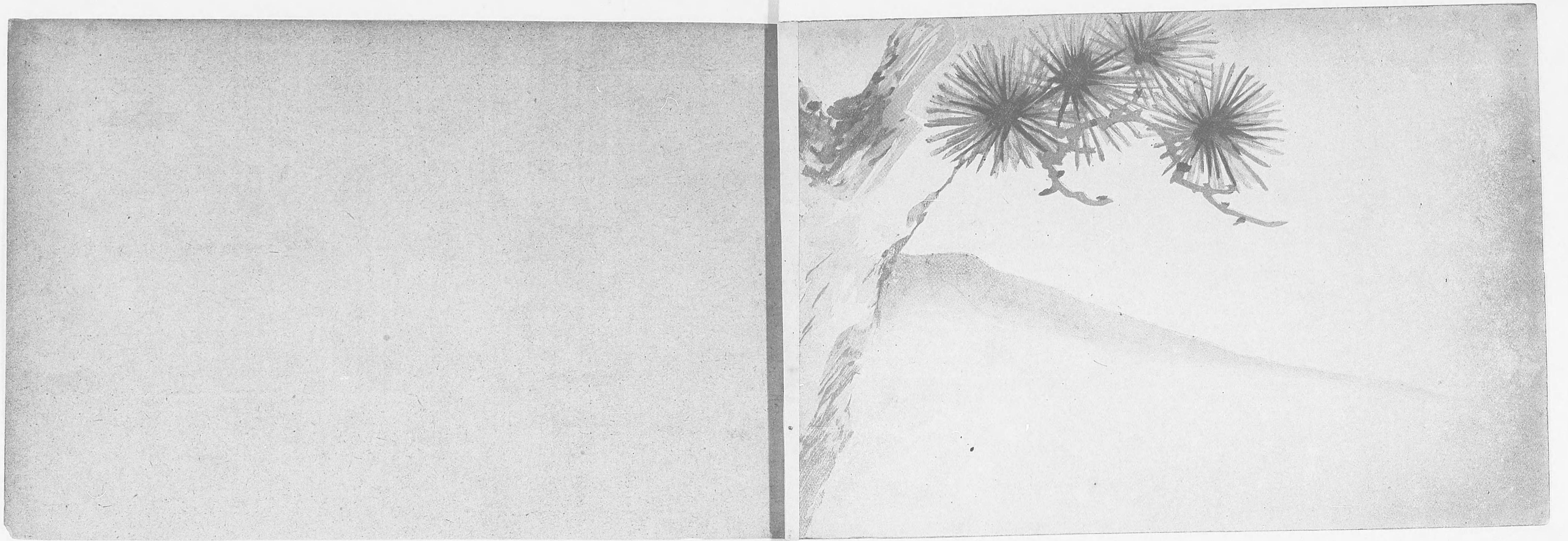
開 辦 三 十 二 年 武 日 之 十 日 發 行

(別 冊 添 土 系 模 廿 五 號)

開 辦 三 十 二 年 武 日 之 十 日 發 行

天







8  
222



終

